

クリの大苗密植栽培による早期成園化

農業研究センター 球磨農業研究所
担当者：岩谷 章生

研究のねらい

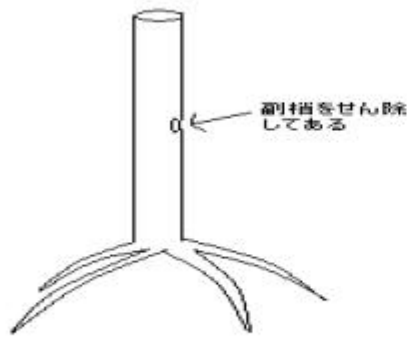
改植、補植を推進するため、単位面積当たりの植栽本数を増やし、接ぎ木当年に発生した副梢を剪除せずに残した副梢利用大苗を使用することによって早期に成園並みの収量を得る方法を確立する。

研究の成果

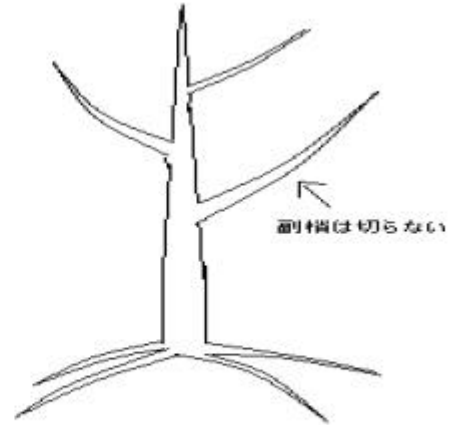
1. 「筑波」では副梢利用大苗を密植することによって、早期に成園並みの収量が得られる(図 2)。
2. 「丹沢」では副梢利用大苗の密植に加え、若木の期間、結果母枝の先端 1/5 を切り返すことにより、果実品質を落とさず、早期に成園並みの収量が得られる(図 3, 4)。

普及上の留意点

1. 隣接樹と樹冠が交差する前に下枝から徐々にせん除する縮伐を行う必要がある。間伐予定樹の下枝を除くことにより、上枝で収量が得られるため、園全体の収量は低下しない。また、風通しが良くなるため、ミタンソ病の発生が抑えられる。
2. 副梢利用大苗を育成する際には基部の太い台木を利用すると後の生育が良い。
3. 台木育成用に使用する種子の品種によって、定植後の生育に影響はない。ただし、「丹沢」を「柴栗」実生台に接いだ場合、後の生育が悪くなるため、避けるほうが望ましい。



通常苗



副梢利用苗

図1 副梢利用苗と通常苗

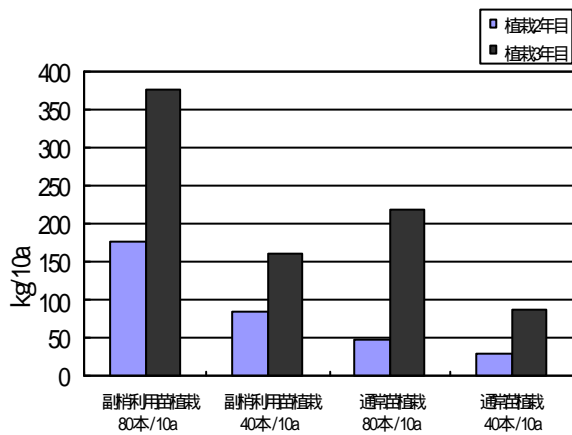


図2 「筑波」の苗木 植栽密度別の収量の変化

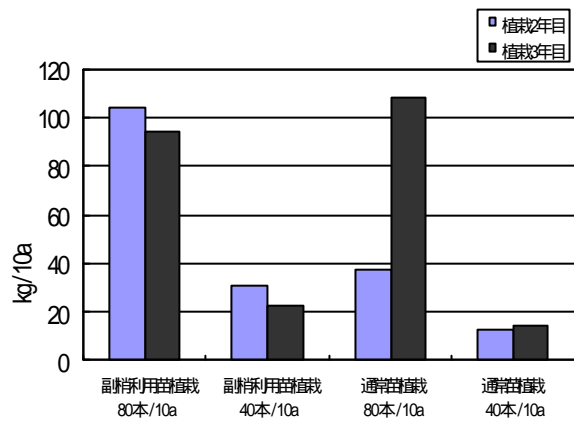


図3 「丹沢」の苗木 植栽密度別の収量の変化

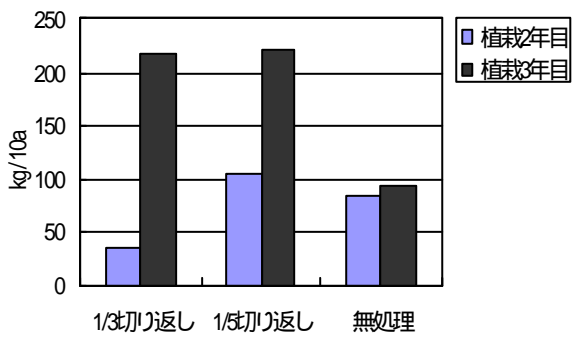


図4 「丹沢」の母枝切り返しが収量に及ぼす影響

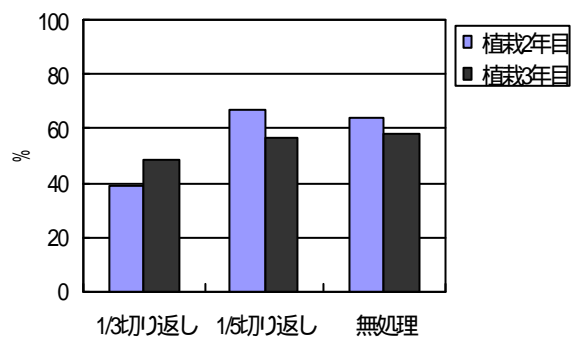


図5 「丹沢」の母枝切り返しが健全率に及ぼす影響

* 副梢利用大苗に処理 80本/10a 植栽

* 副梢利用大苗に処理 80本/10a 植栽